

フランス・キュルチュール 精神分析のはなし 第7話

JAM：精神分析家は偉大なる方法を用いています。この偉大な方法、それは句読点をうつこと、です。そうです、学校で、ひとが書き取りをさせられるときに、しつこく「ちゃんと句読点をうちなさい」と言われる、あれです。

まずははじめに、まさに印刷における句読点をとりあげましょう。

あなたは本を開きます。ページという単位があり、ページのなかには文章が載っていますね。語が互いに分離しています。ひとつのフレーズの初めに、大文字の文字がひとつあります。そしてヴィルギュル (,) とポアン (.)、ポアン・ヴィルギュル (.,)、感嘆符 (!)、疑問符 (?) があります。つまりパロールのなかには存在しない装置すべてがあり、それは書くことを準備する補完であり、支えです。

そして句読点をうつこと、それはかならずしも存在しませんでした。たとえば聖アウグスティヌスの時代、手稿（マニユスクリプト）には句読点は存在しませんでした。語の分離さえも徐々に手稿に取り入れられていったにすぎません。テキストは連續したシニフィアンのリボンのように提示されていました。そして広げられた文章を理解するために—それが詩であれ散文であれ—、学生は語をひとつひとつ、発音しなければなりませんでした。文法の教授とは、まずもって読むこと、声高らかに音読することの教授のことでした。私たちのものである黙読というものは、ほんとうに少しづつ、かなり遅くなつてから歴史に現れたにすぎません。句読点をうつことが導入されたのは、大きな出来事でした。それは完全に読むことの可能性を変質させたものでした。

そしてその大いなる結果として、たとえば、聖書というテキストにおいて、句読点がないということが、根本的な曖昧さの源泉となっています。句読点をうつことが意味を固定し、ひとが句読点を変化させようとすると、意味は再び作られ、ときには意味が完全にひっくり返ることも起こります。そしてもしひとが句読点を打ち間違えるなら、意味は改変されます。

聖書について言えば、正統派と異端の違いとは、句読点の問い合わせにから来ていることもあります。そして句読点を変えることは、あなたはそれを試みることができます、誰かにその意図したことと反対のことをさせるに至るでしょう。そのうえ、多くの場合、言い間違いがこの種の転倒あるいは変化を露わにするものです。

よろしい。おなじような仕方で、分析家が句読点をうつことは、あなたが言っていることにおいて、無意識を読めるようにするものです。精神分析家がことば（パロール）に付け加えるものこそが、本質的なものであるとさえ、言うことができます。分析家の解釈とは、本質的に、句読点を打つことです。そういう理由で、もしひとが句読点をうつことについてリポートするなら、それはヴィルギュル（,）、感嘆符（！）のようなものであり得ます。シンプルな「はい」とか、うなり声ですらあり得るし、また、患者の言表文の反復でもあり得ます。

何故なら、それはあたかもあなたが括弧「 」を置いているようであるからであり、あるいは引用をするかのようであるからです。同じ仕方で、完全に本質的な句読点をうつということ、分析のセッションの中斷が存在します。

この句読点をうつ、という手段を自分に禁じている精神分析家もいます。彼らは分析のセッションは固定された時間が来たら終わらなければならないと、考えています。ほかの精神分析家たちはそんなふうに思っていません。私もです。私たちはそれはセッションの中斷であり、この分析的行為はまったく本質的な要素であると考えています。セッションにおいて言わされたことにその価値を与えるのは、句読点をうつという本質的なことにあると、考えているのです。ですからパロールの句読点をうつということは、主体の意図に対応する意味を伴う可能性があります。

たとえば、あなたは肯定的な告白をこんなふうに認めることができます。いまひとりの人、ある女性患者がいます。彼女はあなたに言います。「私は今日、自由な女性です」、と。もしあなたが彼女がそう告白したところでセッションをおしまいにするなら、句読点をうつことの主要な効果をあなたは生みだしています。その点においてセッションを中斷するということは、「あなたはそう言いました」ということを、当人に聞かせる（理解させる）に等しいことです。

そして実を言えば、それが執拗で、はっきりとしていて、影響を及ぼしていればいるほど、あなたは一言も発しません。あなたは実のところ、それとともに、もうやっていけないと考えているのです。あなたは（分析的）行為をし、強調します。もちろん、そのセッションと次のセッションのあいだに、考える作業は引き続きなされるでしょう。そして場合によつては、女性患者はそのまま続けたかったかもしれません。自身の言葉に溺れたかったかもしれません。しかしさまにそこではあなたは、患者が溺れないように妨害するのです。

こうして結局、彼女は「私は本当に、自分が言ったような、自由な女性なのだろうか」、「私は分析家のうちにまた行って、そうです、私は自由な女性ですと言うつもりなんだろか、同じことを繰り返し言うのだろうか」と自問するようになります。あるいは、彼女は自分自身に与えているその性質について疑いをもつかもしれません。

そして分析家の方は、何も言わなかつたのです。分析家はたんに、彼女を、自らが語ることを聞くというポジションに、置いただけなのです。ですから最小限のものに還元して言ってみるなら、分析的に句読点をうつということは、分析主体に対して、自らが語ることを聞くように導くものである、と、言うことができます。分析とは、こだまの寝室であり、分析家がそこにいるのは、ひとが自らが語ることを聞くことができるよう、本当にちょっとしたずれを持ち込むためなのです。

それと同時に、句読点をうつことは、意味を変貌させ得ます。主体の意図にはもはや対応していない、異なる意味を出現させます。たとえば、この句読点をうつということは、あなたが言ったことのなかの、ある何かを強調することになるかもしれません。それはあなたにとってはまったく付随的なものです。そしてこの句読点により、あなたは自分が思っていた以上にそれが大事なのではないかと自問するよう導かれます。あなたの思考の本質的な要素ではないのか、あなたを動かしている何かなのではないか、とかです。

そして句読点をうつということが、意味を逆転させるところまで行くことがあります。それがフロイトの有名な例です。ある主体がある夢について、あなたに言います。ある人物が覆いをかぶっていて、そのアイデンティティは仮面をかぶっていてぼんやりしています。そもそもその患者があなたに「いずれにせよ、それは母ではありません」と言うなら、いいですか、あなたは「それは母です」と言い得るのです。なぜなら、実は、そこで決定的なこととは、「母」という語が到來したということだからです。

そのとき語がひとつの名詞を付隨しているのは、それが記号だからです。おそらくそれは抑圧されてしまっていて、印をともなうことではじめてあらわれることができるのです。ひとつの名詞のパスポートをともなうことではじめて、あらわれるのです。そのおかげで「母」という語を認めることができるようになったのです。それこそ、フロイトが否定と呼んだものです。

ときおり、否定があまりに強調されたりあまりにしつこかったり、あるいはとどろき渡るよ

うな主張がなされる場合、それは辿るべき道筋となります。その主体が本当に考えていることは、その逆のことなのではないかと考えてみるのです。

ある仕方では、句読点をうつということは、無意識の責任であると言えますし、よりひとが解釈すればするほど、より無意識というものが正しいと明らかになります。もちろん、それは分析の自己評価です。そもそもしお望みであれば、それは分析の弱点です。つまりひとたびひとが分析を始めると、実際、無意識にあるものについて、確信を得るのであります。しかしそれはマジックではありません。それはとても厳密なひとつのプロセスに由来していて、ここで私がお話しできるものよりはるかに正確な座標軸をもつものです。

そして、パロールに句読点をうつということ、それは明らかにそれを書かれたもののように扱うことであると、やはり言えます。読みうる（読まれうる）無意識、それはいわば書かれた物（エクリ）になったパロールであり、書かれた物の大変特別な一様式です。それはパロールにおける書かれた物、です。そのうえ、書かれた物を参照しながらパロールを扱うことで、分析家は喜んで語と戯れます。

語の戯れはパロールと書かれた物の関係を探検します。というのも同じ音のひと続きというものは、ふたつの異なる仕方で書かれ得るからであり、もしひとが語と戯れるのなら、二つの異なる意味を持ち得るからです。とはいって、文学作品の精神分析がとても興味深いということを、それが意味するのではありません。

精神分析の最初から、精神分析家は精神分析から文学作品、演劇、神話等々を除外していました。しかし実のところ、無意識は書かれた物においては読むことが不可能です。パロールにおいてのみ読まれ得るのです。

「私はあなたの言うことを聞きます」（面接場面でよく最初に言われるセリフ）は無意識の読解の条件です。ある人が空しくも書かれた物によって分析がしたいと考えることが起こりますが、それは可能ではありません。この「私はあなたの言うことを聞きます」との関連がなくてはなりません。それが、言わば、分析家のモットーです。「私はあなたの言うことを聞きます」というのは分析家だけではありません。電話交換手もまた「私はあなたの言うことを聞きます」と言いますし、口頭であなたを審査する試験官もそうです。

しかし、電話交換手はあなたの番号を知らないともすむでしょうし、口頭試験官は審査員といっしょにあなたの評価表をつける一方で、あなたはたぶん財産や、自由、人生を賭けることでしょう。ところで、分析の「私はあなたの言うことを聞きます」は、絶対的な「私はあなたの言うことを聞きます」です。この、聞くこと自体、以外のなにも約束しないものです。

ミッシェル・フーコーによれば、分析家とは「耳を貸す」ことだそうです。よろしい、なぞが分析に必要だっただけでなく、紋章も必要だったと言うなら、それは耳となるでしょう。そして身体の穴は精神分析にとってもっとも大きな重要性をもつものです。耳とは、よろしい、閉じることが不可能であるという、特別な性質をもっています。たとえ分析家があなたの背後にいるとしても、分析家の耳が開かれていることをあなたは知っています。もし耳がバルブをもっていたなら一目にはまぶたがあるように、です—たぶん、フロイトが発明した分析的な仕掛け（装置）は、いまと同じものではないでしょうし、効果のあるものではないでしょう。

分析家の聴覚的側面だけがそこにあるのでは、主体にとって十分ではない、ということが起こり得ます。耳を超えた、分析家の身体が目に見えてそこにあることが必要であることが起こり得ます。そこで分析家の「私はあなたの言うことを聞きます」が存在して、主体に「自分が語ることを聞く」を呼び起こすのです。

しかし主体がひとたび自分が話すことに耳を傾けるなら、分析中の主体は分析家に相対することをやめないものです。分析家は自身の同類である他者（autre）のようだからです。そしてじつは分析家を通して、分析主体はべつの絶対者、べつの非人称の他者に向き合いはじめます。分析家は分析主体にただ自身の現存と自身の身体をもって、支えを与えます。

分析家とは、一種の葦でできた人であると、ラカンは言っていました。大文字のAからはじまる＜他者＞（Autre）という、葦でできた人である、と。それで分析を対面方式で行う必要がある主体というのが存在します。というのは、＜他者＞という抽象概念には興味をもたない主体が存在するからです。その主体にとっては、それは有効な対話者ではないのです。というのは抽象概念として、＜他者＞が死んでいることもあり得るからです。他方、主体のほうは、他者の欲望にひっかかっているのです。

そういうわけで、このような主体にとり、他者が生きているのだと確かめることが可能なことが、とても重要になるのです。この他者が生きていて、じつはこの他者もまさに欲望をも

っているのだと確かめることができ、大変重要なことです。したがって、完璧でないような、何かが、その他者には欠けています。そしてこの他者が生きているのだと確証するために、主体は分析から生命と欲望のサインを受け取りたいと望むのです。それでこのような主体にとっては、「私はあなたの言うことを聞いています」だけで定義される、つまり耳によってだけ定義される分析家で満足することが、難しいというわけです。

そして分析主体こそ、むしろ分析家を呼ばせるものです。分析家は場合によっては軌道を逸した、独創的な表現でもって、分析主体を呼ばせようと努めるのですが。その表現というのは、分析家は生きている、場合によってはたとえばねたみを持っているとか、そしてやはり人が自分をほっておいてくれることを望んでいるなどと、示すことにあります。

分析家たちのなかには、このタイプの主体は分析不可能であると考える人もいます。というのは彼らは目に見えない他者と向き合うことができないからです。そうですね、私が思うに、私のように実践している人たちは、この種の主体をかなり穏やかにすることができます。分析を可能にできます。生きているというある種のサインを与えるという条件があれば、です。

私はまだ続いている、奇妙なパラドクスすら、思い起こすことができます。私の家に、ある人との分析後5年経ってからやってきた人がいます。婦人です。彼女は以前の分析家とともにうまく行っていました。彼女は私に、以前の分析家は、朝の時間帯の分析ではかなり頻繁に寝ていたと語っていたにもかかわらずです、(笑)。ですから結局のところ、眠っていたものだから、その分析家は意味作用、あらゆる意味作用という点では、かなり遠い所にいたわけです。

しかしその分析家が支えることができたのは、彼がいびきをかいていたからこそなのです。そしていびきというのは、生きているサインなのです。もちろん、この例はまったく限界例であって、それが精神分析家たちに推奨されるあり方ではまったくないということを、私はあなたに断言しておきます。